

閲覧ニュース

28号

1980. 12

1. 開館・閉館のお知らせ

12/17 (水) まで9時～6時開館

12/18 (木) ～ 12/24 (水) 9時～5時

12/25 (金) ～ 1/5 (月) まで閉館

1/6 (火) ～ 1/7 (水) 9時～5時開館

1/8 (木) ～ 9時～6時開館

2. 冬休み長期貸出

12/10 (木) ～ 1/10 (土)

1人5冊まで

Ⓢ 但し、返却日を厳守!! のこと。



提案文へのお答え

①土曜日の開館延長について

現在、教養図書館は、土曜日は一時で閉館しております。これに対して開館延長を望む声がありましたが、前回お答えしましたとおり、開館時間延長は当分見込みがありません。それで、代案として『土曜日、午後1時から5時まで101教室を自習室として学生諸君の使用に供すること』を大学側にお願ひしましたところ、それが実現することになりました。皆様の利用を期待しております。

②「日本経済新聞」を入れて欲しい。

図書館運営委員会で検討した結果、購入が決定しました。既に10月より定期購入して新聞架で読める状態にありますから、ご利用下さい。

カントの生涯 (I)

山根 和平 (哲学)

「ヴォルテールの世紀」と言われた十八世紀は、ヴォルテールに代表されるような啓蒙の世紀であったと言えるでしょう。フランスの百科全書家に代表される啓蒙主義は、フランスからヨーロッパ全体にひろがり、やがて全世界にひろがっています。日本も十九世紀の後半（明治初年）に啓蒙主義の洗礼を受け、福沢諭吉のような啓蒙思想家が現われてくるのです。

カントは、この十八世紀に生まれて、生涯の大部分を十八世紀にすごした人です。しかし、思想の流れから見ると、カントは啓蒙主義の運動を受け入れ、完成させるとともに、他方では、啓蒙主義をのりこえて、新しい時代思想の地平をひらいたと言えるでしょう。過去の哲学の流れは、すべてカントにおいて集約され、新しい哲学の流れが、あらためて、カントから始まることになるのです。そのような意味で、カントは哲学史のなかの一つの結節点であると言えます。カントを理解しなければ、十九世紀から二十世紀にかけての哲学の流れは理解できません。カントが産業革命の哲学者と言われるのは、産業革命を支えてきた思想的基盤のなかで、カント哲学が重要な役割を果たしているからでありましょう。ところが、現代は、まさに産業革命の結果によって、われわれの生活が左右されている時代なのです。

イマヌエル・カントは1724（享保9）年、東プロイセンの首都ケーニヒスベルク市（現在のソ連領カリーニングラード市）に生まれました。23歳から30歳までの7年間、家庭教師をしていた時期に、東プロイセンの小村ユートシェンとグロス・アルンスドルフに出かけたのは、生涯ケーニヒスベルクを出たことはありません。カントが、のちにケーニヒスベルク大学においておこなった一般公開講義のなかでも、とくに「自然地理学」の講義は人気があり、さまざまな職業の人たちが、カントの講義を聴講

したとされています。また、ケーニヒスベルクはブレーゲル川の河口にある港町ですが、この港にやってくる老水夫も、カントの地理学の知識が豊富で正確であるにおどろいたという話も伝えられているようです。けれども、かれの地理学の知識は、ほとんど全部が書物から得たもので、たとえば、日本については、ケンペルの『日本誌』によって知識を得たものとされています。

このように、生涯のほとんど全部をケーニヒスベルクですごしたということは、カントの哲学を考えていく上で重要なことであると思います。ケーニヒスベルクは、東プロイセンの首都で、国王の戴冠式がおこなわれる習慣があったようですが、しかし、地図で見ると、ベルリンやライプツヒヒなどプロイセンの心臓部から遠くはなれた辺境地帯の田舎町にすぎません。もともと、ケーニヒスベルクは、ブレーゲル川をくだってくる川舟が、ポーランドや白ロシアの平原地帯で産出する豊かな農産物をはこび、イギリスやオランダの船で西欧からはこばれてくる日用品と交易するための港町として栄えたところですから、東プロイセンと言っても名ばかりで、むしろ、ロシア人やポーランド人などスラブ系の民族にとりまかれ、ドイツの風俗、習慣、言語、文化、思想、宗教とは、まったくちがった風土のなかで、脈動をつづけてきた町なのです。ここから、カント哲学＝ドイツ哲学といった短絡的な思考が、いかに誤解をまねくものになるか、おわかりいただけると思います。

さらに、もう一つ注意すべきことは、カントの家系にはイギリス人の血がまじっているということです。カントの曾祖父は、スコットランドの移民で、バルト海の奥にあるリガという町（現在のソ連領ラトビア共和国の首都）にやってきました。それが祖父の代にメーメル（現

在のクラベイダ)に移り、さらに父の代になってケーニヒスベルクに来ることになりますから、バルト海の沿岸を北東部から南西部へむけて転々と移住してきたことになります。曾祖父のことはよくわかりませんが、リガで飲み屋をやっていたと伝えられていますから、おそらくは、スコットランドの貧民で、どうしても故郷では生計が立たなくなって、やむを得ずに他郷に移ってきたものでありましょう。そんなわけで、カントの父ヨハン・ゲオルク・カントの代には革具職の親方になっていたとはいえ、カントの生まれた家庭は、きわめて貧しい家庭でした。カントの家庭については、すぐあとで触れることになりますが、ここでは、カントのイギリス志向とでも言うべきものを指摘しておきたいとします。カント自身が生涯をすごした風土は、すでに述べたようにスラブ的な風土であったとしても、カントは自分の先祖がイギリス人であったことを知っており、この遠い故郷に対しては特別の愛着をおぼえていたようです。カントが若いときにニュートンの著書をクヌッツェン(ケーニヒスベルク大学哲学部助教授)から借りて読んだという話が伝えられていますが、当時のドイツで、とりわけ、ケーニヒスベルクの田舎町で、ニュートンの著書に興味をひかれた人がそれほど多かったとは思えません。また、後半になって、スコットランドの哲学者であるデヴィッド・ヒュームの著書を読んで「独断のまどろみから目をさまさせられた」と語ったことは有名な話ですが、このヒュームの哲学も、当時のドイツではそれほど重要視されていたわけではないので、わざわざヒュームを取りあげて読むということ自体が、カントのイギリスに対する特別の志向を示しているように思われます。この点から見ても、カント哲学＝ドイツ哲学というような軽々しい断定は避けなければならないものでありましょう。じっさいに、『純粹理性批判』のなかで、経験というものをカントがどのようにあつかっているかを見れば、イギリス的な思想的伝統が、どれほどカント哲学のな

かに生きているかが、おわかりになると思います。

さて、さきほども述べましたカントの父ヨハン・ゲオルク・カントは1715年に、ニュールンベルク出身の職人の娘アンナ・レギーナ・ロイターと結婚し、一家をかまえました。カントは長男で、ほかに姉ひとり、妹3人、弟1人がおり、さらに他の3人の子供は夭折しています。一家をかまえたと言っても、6人の子供がおり、たいへん貧しい家庭であったことは否定できません。家もケーニヒスベルクの中心部から離れた「町はずれ」といった感じの場所にありました。こうしたわけで、両親ともに学問も教養もなく、幼時の家庭教育といっても、内容はたいへん貧弱なものであったようです。ただ、両親ともにプロテスタントのなかで敬虔派とよばれる宗派に属し、たいへん熱心な信者であったことが知られています。カントの両親は、子供たちに、知識としてのキリスト教をつめこむのではなく、むしろ、両親の行動によって、キリスト教の精神を子供たちに伝えようとしたのではないかと思います。同業者たちのいざこざや争いがあっても、カントの両親の家へ来れば解決したと伝えられるほど、かれらは円満な人格をもった人たちであったようです。カントも他の子供たちも、こうした両親の態度から多くのことを学んだのでありましょう。このことは、カント哲学、とくに、道徳と宗教の学説を考える上で、かなり重要な意味をもっており、また他方では、われわれに家庭教育についての反省をさせる材料にもなると思います。

このようにして、カントは1730年に6歳で聖ゲオルク養老院付属小学校に入り、1732年に8歳でコレギウム・フレデリキアヌムに転校し、ここに8年いて、1740年にケーニヒスベルク大学に入学します。このコレギウムは、当時ケーニヒスベルク市の宗教監督で、ケーニヒスベルク大学の神学部教授でもあったフランツ・アルベルト・シュルツという人が院長をしており、ラテン語と宗教教育を重視してい

たということです。このシュルツ院長が敬虔派の信者であり、哲学の面ではヴォルフの学派に属していたということも、のちのカント哲学を

考えていく上で注意すべきことでありましょう。
(以下次号)

推薦図書について

下記の図書は、教養部の先生方から新たに推薦して頂いたものです。なお、今回推薦のなかった先生については、推薦され次第、お知らせ致します。

※ 推薦者はアルファベット順です。(敬称略)

※ 図書は推薦者の推薦順位に従っています。

※ ☆印は、只今整理中の図書です。

推薦図書リスト

天野卓治〔物理学〕

広島の記録 1, 2, 資料編

916/C62, C62h, C62s

中国新聞社編

1966 未来社

黒い雨

913.6/I12

井伏鱒二著

1968 新潮社

わが解体

914.6/Ta33w

高橋和己著

1971 河出書房新社

愛と認識との出発

⊗914.6/Ku56a

倉田百三著

1968 角川書店

叛逆のバリケード

377.96/N71

1969 三一書房

青野桂子〔物理学〕

山椒魚

⊗913.6/I12

井伏鱒二著

1975 新潮社

モラトリアム人間の時代

361.6/O53

小此木啓吾著

1980 中央公論社

知と愛

⊗943/H53c

ヘッセ著(高橋健二訳) 1961 新潮社

沈黙

913.6/E59

遠藤周作著

1966 新潮社

忘れられた日本人(宮本常一著作集第10巻)

380.8/Mi77/10

宮本常一著

1975 未来社

入手高嶺雄〔数学〕

戦争と平和

⊗983/To47h/V.1~V.8

トルストイ著(米川正夫訳)

1967 岩波書店

罪と罰

⊗983/D88t/V.1~V.8

ドストエフスキー著(中村白葉訳)

1970 岩波書店

権力とたたかう良心(ツヴァイク全集17)

948/Z9/17

ツヴァイク著(高杉一郎訳)

1974 みすず書房

石川俊明〔物理学〕

新電磁気学 上・下巻

☆

飯田修一著

丸善

伊藤彰夫〔体育〕

衝突する宇宙

445/V56

ヴェリコフスキー著(鈴木敬信訳)

1974 法政大学出版局

伊藤幸子〔英語〕

カママーゾフの兄弟 ⊗983/D88/V.1~V.4

ドフトエフスキー著(米川正夫訳)

1967 岩波書店

饗宴

⊗131.3/P71

プラトン著(久保勉訳)

1967 岩波書店

異邦人(カミュ全集2)

958/C14/2

カミュ著(中村光夫訳)

新潮社

芭蕉七部集

⊗911.32/Ma85

中村俊定校注

1966 岩波書店

雨月物語

⊗913.56/U32u

上田秋成著

1953 岩波書店

神達章子〔数学〕

夜と霧

946/F44/C.2

フランクル著(霜山徳爾訳)

1974 みすず書房

猫と鼠

943/G77

グラス著(高木研一訳)

1972 集英社

ニュルンベルク裁判 ☆
 マーザー著(西義之訳) TBSブリタニカ
 積みすぎた箱舟 480.4/D88a
 ダレル著(浦松佐美太郎訳)
 1977 暮しの手帖社
大橋常道〔数学〕
 星を継ぐもの ㊦933/H81
 ホーガン著(池央耿訳)
 1980 創元社
 走馬燈ーその人たちの人生ー 198.221/E59
 遠藤周作著 1977 毎日新聞社
 生物はなぜ進化したか 467.5/A86
 浅門一男著 1979 講談社
 人間の終焉 404.9/W46
 渡辺格著 1976 朝日出版社
 反科学論 404/Sh18
 柴谷篤弘著 1973 みすず書房
 オットー・ハーン自伝 ☆
 山崎和夫訳 1977 みすず書房
岡野安洋〔独語〕
 中原中也全集(全5巻・別巻) ☆
 中原中也著 角川書店
 石原吉郎全集(全3巻) ☆
 石原吉郎著 花神社
 詩への架橋 岩波新書12
 大岡信著 1977 岩波書店
小野健一〔物理学〕
 解析概論 413/Ta29
 高木貞治著 1938 岩波書店
 類人猿の知恵試験 481.78/Ko22
 ケーラー著 1962 岩波書店
 風車小屋だより ㊦953/D45f
 ドーデー著(桜田佐訳)
 1932 岩波書店
坂入 清〔独語〕
 学生に与う ㊦159.7/Ka93g/V.1
 河合栄治郎著 1975 社会思想社
 論語 ㊦123.83/Ko84
 貝塚茂樹訳注 1979 中央公論社
 ファウスト ㊦942/G56
 ゲーテ著(手塚富雄訳)
 1974 中央公論社

後世への最大遺物 190.4/U19
 内村鑑三著 1969 岩波書店
 独学のすすめ 370.4/Ka86
 加藤秀俊著 1975 文芸春秋社
瀬谷幸男〔英語〕
 四つの愛 934/L59
 ルイス著 1970 新教出版
 オシアン(ケルト民族の古歌) ☆
 中村徳三郎訳 岩波書店
 紀行と随想 304/H88
 堀米庸三著 1976 近藤出版
 デカメロン物語 ☆
 野上素一訳
 ギリシャ抒情詩選 ㊦991/G47
 呉茂一訳 1959 岩波書店
正田庄次郎〔経済学〕
 生活の貧しさと心の貧しさ 304/O88
 大塚久雄著 1979 みすず書房
 折々のうた 岩波新書113
 大岡信著 1980 岩波書店
 女性の権利の擁護(上)・(下) ☆
 ウールストンクラフト著 清水書院
 物理学とは何だろうか(上)・(下) 岩波新書85,86
 朝永振一郎著 1979 岩波書店
 生きがいについて 159/Ka39
 神谷美恵子著 1966 みすず書房
高橋康子〔体育〕
 未来行き列車に乗って ☆
 真鍋博著 文化出版局
 歴史は生きている ☆
 村上元三著 ゆまにて出版
 墨いろ 728.04/Sh66
 篠田桃紅著 1979 P.H.P.研究所
 食 味 ☆
 辻嘉一著 P.H.P.研究所
 歴史・遠いあし音 ☆
 尾崎秀樹著 ゆまにて出版
立川昭二〔歴史学〕
 ガン病棟(上)・(下) 983/So35/V.1~V.2/C.2
 ソルジェニーツィン著(小笠原豊樹訳)
 1969 新潮社
 方丈記私記 9146/H96h/C.2
 堀田善衛著 1971 筑摩書房

椿の海の記 ☆
 石牟礼道子著 1976 朝日新聞社
 自註鹿鳴集 ☆
 会津八一著 中央公論美術出版
 慰めの音楽 760.4/D84
 デュアメル著(尾崎喜八訳)
 1974 白水社
 山根和平〔哲学〕
 最後の診断 ㊦933/H15
 ヘイリー著(永井淳訳)
 1979 新潮社

医学の哲学 490.11/O63
 澤潟久敬著 1971 誠信書房
 裸のサル 481.7/Mo78
 モリス著(日高敏隆訳)
 1977 角川書店
 ヒトと動物 481.78/H77
 ローレンツ他著(奥井一満訳)
 1975 思索社
 ライフサイエンスの哲学 ㊦461/Sa93
 沢田允茂著 1969 講談社

新 書 案 内 (1980. 7月～11月分)

ある終戦工作 森元治郎著 中公新書 581
 縄文土器をつくる 後藤和民著 " 582
 主体性の進化論 今西錦司著 " 583
 シャーマニズム——エクスタシーと " 587
 憑霊の文化——佐々木宏幹著
 アンデスを越えた日本人——聖母 " 588
 の川を下る——向一陽著
 敦煌の石窟芸術 潘絮茲著 " 589
 町内会——日本人の自治感覚 " 591
 中川剛著
 生命と自由 渡辺慧著 岩波新書 122
 抵抗の新聞人桐生悠々 " 123
 井出孫六著
 中世ローマ帝国——世界史を見直す—— " 124
 渡辺金一著
 コマの科学 戸田盛和著 " 125
 ギリシア哲学と現代——世界観の
 ありかた—— " 126

北京三十五年—中国革命の中の 岩波新書 128
 日本人技師一上・下巻 山本市朗著
 干潟は生きている 栗原康著 " 129
 現代のプライバシー 堀部政男著 " 130
 軍政と受難——第四・韓国からの " 131
 通信—— T・K生(著)
 ロース河歴史紀行——アルプスカ " 132
 ら地中海へ——笹本駿二著
 英語の構造上・下 中島文雄著 " 133
 接着とはどういうことか " 135
 井本稔, 黄慶雲共著
 日本中世の民衆像——平民と職人—— " 136
 網野善彦著
 バイオリズム——その原理と応用——
 レ・クビリャノヴィッチ著 現代新書 577
 金光不二夫訳
 「豊かさ」とは何か 飯田経夫著 " 581
 祭の社会学 松平誠著 " 582

閲覧ニュース28号

1980. 12. 発行

北里大学教養図書館

発行責任者 小 野 健 一